



展示室入口に掲げられた『疫病とくらし』の看板

凧は厄払いの道具として、疫病退散の祈りをこめて「鍾馗」  
などが描かれた厄除け凧をあげる風習がありました。

## 令和2年度季節展「疫病とくらし」の開催にあたって

わたしたちは今、新型コロナウイルスの影響により、諸々の行動制限を受け、心身ともに厳しい状況にあります。新型コロナウイルス感染症がメディアで盛んに報道されるようになり、わたしたちはとても困惑し混乱しました。春先からしばらくはマスクやアルコールが品切れで入手できなくなり、薬局の前には長い行列ができました。マスクの供給は落ち着きましたが、うがい薬が薬局から消えるという事態が起きました。災害が起きるたびに繰り返されるこの買い占め現象も混乱の一端です。なぜこんなことが繰り返し起きるのでしょうか。根幹的な原因は、目に見えない新型コロナウイルスに対する恐怖心なのではないでしょうか。そして見通しのきかない先行きに対する底知れぬ不安感。先人たちは、この目に見えない恐怖を「魔」と称しました。病も目に見えず忍び寄ります。魔の仕業、だから「病魔」なのです。

病に対する人間の対処について、「医学・医療の未熟な時代は、まじないや祈祷にすぎるしかなかった。」といった説明をよく目にします。祈り⇒医学（科学）、未発達⇒発達という進化論的なベクトルでの考え方です。しかしこの考え方には疑問を抱かざるを得ません。今現在は、果たして医学・医療が発達した時代なのでしょうか。今現在と過去を比較したら、現在の医学は確かに発達しているでしょう。しかし、100年後の未来から現在を見たら、間違いなく「医学・医療未熟の時代」と評されるのではないのでしょうか。これは「歴史」に対する見方・考え方に大きくかわります。現代からの過去の評価でわかるものもありますが、その時点での目線で見えていくことでつかめるものもあります。その時、その時代が常に「現代」なんだと考えて過去を見ていく。そうすると、医学・医療は常に最先端なのではないか。時間の経過は、最先端の更新を繰り返す過程なのではないかと考えられます。

まじないや祈祷といった習俗はどうでしょうか。これらは古代から近代・現代に至ってもなお残り続けています。今でもわたしたちの身の回りには、

かつてまじない道具とされたものが多く残っています。縁起物として現代でも生産され続けている品々もあります。しかしわたしたちはその道具の由来、縁起の本来を忘れてしまっています。長い時を経て復活するものもあります。だいぶ有名になりました妖獣「アマビエ」。厚労省のCMの効果もあるでしょうが、もともとは弘化3年（1846）の瓦版に掲載されたものです。こういったものが、当時に比べれば飛躍的に医学・医療が進歩した今の時代に再び姿をあらわしてきます。蘇民符<sup>そみんふ</sup>や門守<sup>かどもり</sup>、柊鱒<sup>ひらぎにし</sup>を玄関に掲げる家もまだまだあります。

こういったことからわかるのは、医学・医療と習俗の関係においては、習俗⇒医学・医療という考え方はやはり成り立たないということです。ではどういった関係にあるのか。そこを考え直そうとしたのが今回の展示です。

テーマを「医学・医療」、「衛生観念」、「習俗」といった観点から構成しております。医学・医療は病に冒された身体の治癒に必要です。衛生観念は病に対する予防として必要です。マスク着用もうがいも手洗いもアルコール消毒も衛生観念です。では、習俗とは何のために必要だったのか。習俗は病に役立つのでしょうか。それぞれがどう絡み合っていたのか、先人たちはどのように疫病と向き合ってきたのか。そういったことも想像しながら見ていただけたら幸いです。

今回の展示は、元々の館蔵資料の他に、市民の方々からの寄贈品・寄託品を多く展示しています。あらためて資料を精査した結果、新たに貴重な資料もみつかりました。また、幸手市郷土資料館、春日部市郷土資料館、日本史学者の大館右喜先生からは、貴重な資料をご提供いただきました。書道家・酒井春蘭先生には展示テーマの題字をお願いいたしました。スタッフを含め、今回の展示に関わられたすべての皆さまに、この場を借りて感謝申し上げます。

館長

## 村境に立てて疫病が入ってこないようにする「フセギ」



「下吉羽の辻繩」  
幸手市



「伊豆島の大蛇」  
蓮田市



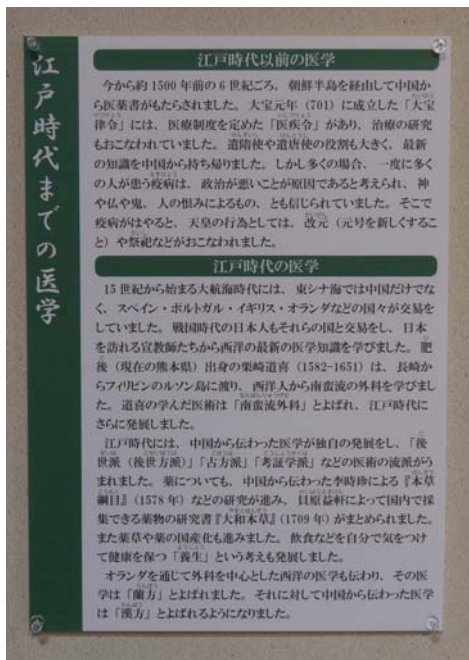
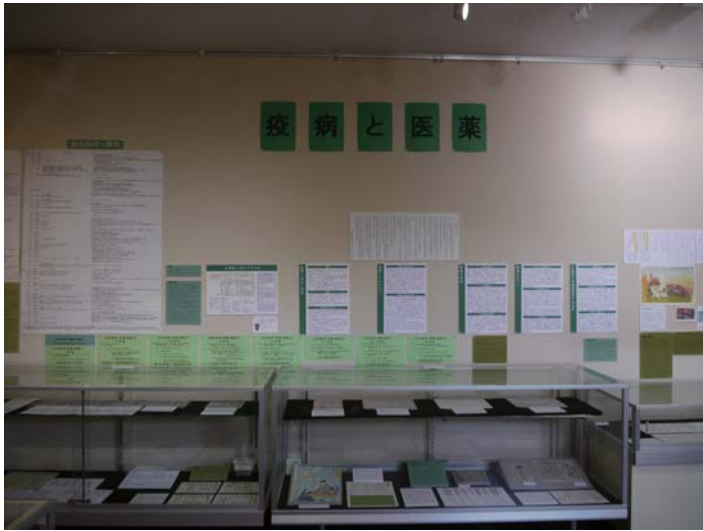
「フセギ」は、村の人が協力して作った藁へびを村の境界や川の境界に立て、へびの目が村の外をにらむことによって、疫病や悪いものが村の中に入らないようにするという意味があります。埼玉地区は、古くから農村地帯であったため、藁で作り物をする行事が多くあり、作られるものの大半がへびで「フセギ」に用いられています。また、全国的にも藁を使ったものが「フセギ」として使われています。

この展示では、「いよいよここから展示が始まりますよ」という意味でここに「フセギ」を立てました。

展示は、大きく2つのゾーンに分かれています

「疫病と医薬」のコーナー

「病除の習俗」コーナー



左から「蘇民符」（紙製と木製）、「津島天王疫神除御守」、「氷川神社疫神齋」、「角大師御札」、「疱瘡守」、「大般若経転読祈祷御札」



上：壁面展示「江戸時代までの医学」  
下：展示ケース左から「護符」、「湯治」に関する文書、「三浦家文書」

上段：「医師からみた習俗」、「乳香」  
下段：左から「生薬と現代の薬」、「薬研と人参」

## 疫病と医薬

### 「疫病」

「疫病」の呼称は時代によって異なります。『日本書紀』（720年成立）では「疾疫」、「疫疾」、「疾気」と書いて「えやみ」、「えのやまい」と読めます。承平年間（931-938年）に成立した緩和辞書『和名類從抄』には「疫」を「衣夜美（えやみ）」と読み、「度岐之介（ときのすけ）」とも言うとかかれています。「ときのすけ」とは「時の気」で、天候不順を表します。これは大雨による洪水や干ばつが起こると、飢饉が発生し、疫病も流行することによります。

「伝染病」という言葉が使われるようになったのは幕末です。戦後、抗生物質によって伝染病が治る病気となってから、1960年代に伝染病学会は「伝染病に代わって「感染症」を採用しました。



「護符」

「大己貴命（おおなむちのみこと）」

「少彦名命（すくなひこなのみこと）」

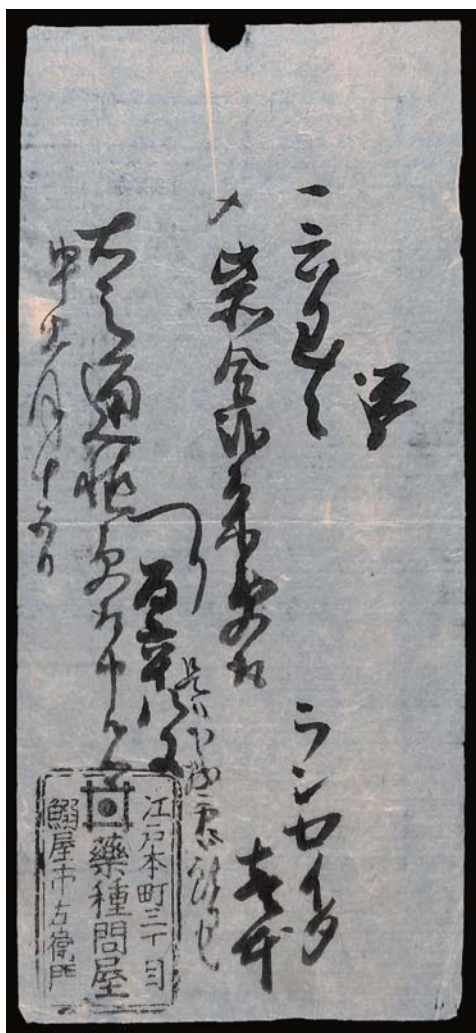
### 「日本の医薬祖神」

大己貴命（おおなむちのみこと：のちの大国主命）と少彦名命（すくなひこなのみこと）は、日本の開発神であるとともに、医薬の神様としても崇められています。

大己貴命は「因幡の白うさぎの伝説」では、皮を剥がれた白うさぎに治療の方法を伝授します。一方で、兄達にだまされ、火のついた岩を抱えさせられ、火傷を負った時には赤貝と蛤による治療が施され復活したとされます。これらはわが国最古の薬の記録でもあり、大己貴命と医薬の関りを示す話といえます。

少彦名命は、大己貴命の補佐役として国づくりを進めたとされます。酒の神様ともされますが、これは酒が薬の一部でもあったからなのでしょう。

## 「蓮田市の医業より、ランセイタ（ランセット）」



「ランセイタ壺本代受取」  
(年未詳) 申年 11 月  
(三浦家文書)

外科道具の一種であるランセイタ (lanceta) を購入した領収書です。ランセイタ (またはランセット) は皮膚病の治療や、種痘を植える際にも使われました。

三浦家に伝わる資料からは、蘭学や種痘に関するものは確認されていないため、この道具は腫物などの皮膚病の治療に用いられたと考えられます。

薬種問屋「鯛屋」は外科道具を扱う店としても有名で、江戸名所図会にも描かれています。



「ランセット (lanceta)」  
(江戸東京博物館蔵)

「江戸時代・明治初期の輸入医薬品・医療機器の実態調査と現存資料の総目録の成について」より転載

### 三浦家文書

三浦家は、江戸時代後期に下蓮田村で2代にわたって医業を営んでいました。蓮田市文化財展示館には三浦家から寄託された文書が1,452点保管されており、蓮田市の指定文化財になっています。

## 「家庭の医学書」



『救民妙薬』

元禄6年（1693）

（国立国会図書館蔵）

医学・医療は発達しても、それを万民が受けられるというわけではありません。水戸藩内を調査し、庶民が医師の治療を受けることや薬を入手することが困難なことを知った徳川光圀は、元禄6年（1693）、藩医の穂積甫庵に命じて、日本で最初の家庭の医学書ともいわれる『救民妙薬』を作らせました。

『救民妙薬』には、容易に入手できる身のまわりの薬草や動物を利用しての薬の作製法、病気の対処法、日頃の健康法が書かれています。以後幾度となく重版され、近代になっても売っていました。

展示した『家秘 妙薬撰』も『救民妙薬』をベースにしていると考えられる資料です。対処法には、湿疹や漆かぶれ、蜂に刺されたときなど皮膚科に分類されるもの、頭痛や食あたりなど内科に分類されるもの、その他、切り傷、やけど、打ち身など外科に分類されるものなどが書かれています。



『家秘 妙薬撰』

江戸時代

（蓮田市下蓮田）



# 「ワクチン接種へ」



「牛痘種痘奨励錦絵」

嘉永3年(1850)

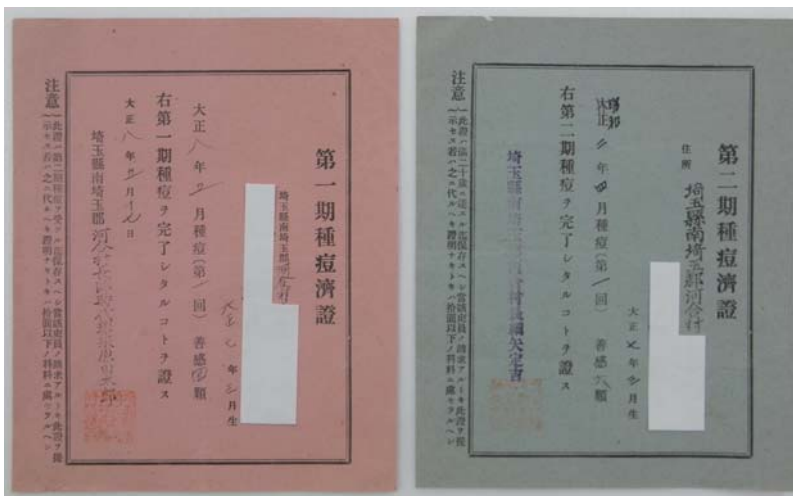
(『小児を救った種痘学入門』より転載)

大坂の除痘館で頒布された版画です。白牛の上に乗った「牛痘児」が、紅い御幣と餅がのった棧俵をかぶった「実ハ悪魔 痘瘡神」を追い払っています。牛痘児が持つ槍の先には、種痘に使用されたランセットが結び付けられています。痘瘡神を、祀る存在ではなく退治する存在として描いています。このような版画は、江戸の医者桑田立斎によって初めて作られてから、何度も刷られ続けました。

槍先部分拡大



槍に結ばれたランセット



「種痘済証」

大正8年(1919)5月・昭和2年(1927)4月  
(蓮田市馬込)

種痘を接種したことの証明書です。種痘は明治9年(1873)に制定された「天然痘予防規則」により、すべての日本人が必ず受けるべき国民の義務となりました。「善感」とは、接種の跡がはっきりとついて免疫が獲得されたことを示します。種痘接種は昭和51年(1976)まで約100年間続きました。

# 感染症史

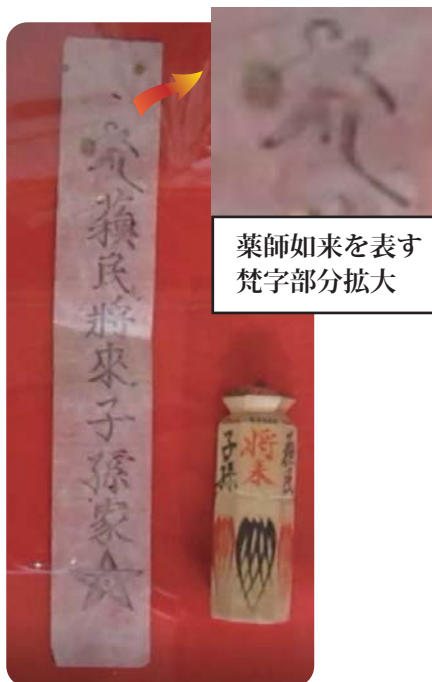
| 時代 | 西暦   | 和暦   | おもな感染症                    | 備考                                     |
|----|------|------|---------------------------|--|
| 飛鳥 | 五三八  |      | 痘瘡流行                      | 百濟からの仏教伝来と同時期のため僧侶たちが持ち込んだといわれている      |
|    | 五八四  |      | 疫病（痘瘡か）流行                 |  |
|    | 五八五  |      |                           |  |
|    | 五八七  |      |                           |  |
| 奈良 | 七三五  | 天平七  | 九月 痘瘡大流行（天平の疫病）           | 藤原四兄弟、痘瘡により相次いで死去する。人口の三〇%が死亡したとみられている |
|    | 七三七  | 天平九  | 五月、十月 痘瘡大流行               |  |
|    | 七九〇  | 延暦九  | 秋、冬 痘瘡流行                  | 新羅国か遣唐使が持ち込んだとみられている                   |
|    | 八五三  | 仁寿三  | 三月、十月 痘瘡流行                | 用明天皇が疫病（痘瘡か）で崩御する                      |
|    | 九四七  | 正暦一  | 七月、十一月 痘瘡流行               | 敏達天皇が疫病（痘瘡か）で崩御する                      |
|    | 九九五  | 正暦六  | 三月 痘瘡流行                   | 改元（正暦から長徳へ）                            |
|    | 九九八  | 長徳四  | 七月、八月 麻疹大流行               | 藤原道長の兄 道隆、道兼が痘瘡で死去する                   |
|    | 九九九  | 長徳五  |                           | 死亡率の高さから「命定め」と呼ばれる                     |
|    | 一〇二〇 | 寛仁四  | 五月 痘瘡大流行                  | 麻疹の流行がおさまらず改元（長徳から長保へ）                 |
|    | 一〇二五 | 万寿二  | 八月、十月 麻疹流行                | 幼児に流行か 後一条天皇が大赦・免税を行う                  |
|    | 一〇四四 | 長久五  | 十二月 感染症（痘瘡か）流行            | 皇太子妃・藤原嬉子が麻疹で崩御する                      |
|    | 一〇五二 | 永承六  | 冬、翌年末 感染症（痘瘡か）大流行         | 改元（永承から天喜へ）                            |
|    | 一〇七七 | 承保四  | 麻疹大流行                     | 改元（長久から寛徳へ）                            |
|    | 一〇九四 | 寛治八  | 冬、痘瘡・麻疹流行                 | 白河天皇の第一皇子、麻疹のため四歳で逝去する 改元（承保から承暦へ）     |
|    | 一一二六 | 天治二  | 二月 痘瘡流行                   | 翌年改元（寛治から嘉保へ）                          |
|    | 一一六三 | 永暦二  | 痘瘡流行か                     | 改元（永暦から応保へ）                            |
|    | 一一七一 | 応保三  | 麻疹流行                      | 改元（永暦から長寛へ）                            |
|    | 一一七五 | 承安五  | 春、痘瘡大流行                   | 改元（応保から長寛へ）                            |
| 鎌倉 | 一二〇六 | 元久三  | 麻疹流行                      | 改元（元久から建永へ）                            |
|    | 一二〇七 | 建永二  | 夏ごろ 痘瘡流行                  | 改元（建永から承元へ）                            |
|    | 一二二五 | 元仁二  | 冬、春 痘瘡流行                  | 改元（元仁から嘉祿へ）（元仁に改元されてから五か月）             |
|    | 一二二八 | 嘉祿四  | 十一月、麻疹大流行                 | 改元（嘉祿から安貞へ）                            |
|    | 一二五六 | 建長八  | 夏ごろ、京都と鎌倉で麻疹大流行           | 改元（建長から康元へ）                            |
|    | 一三三〇 | 元徳三  | 痘瘡大流行                     | 改元（嘉祿から安貞へ）                            |
| 室町 | 一三六〇 | 延文五  | 感染症（痘瘡か）流行                | 後醍醐天皇の勅により浄土宗知恩寺にて百万遍念仏を行う             |
|    | 一四五二 | 宝徳四  | 春 痘瘡流行                    | 翌年改元（延文から康安へ）                          |
| 江戸 | 一六六二 | 寛文二  | 二月、長崎で乳幼児を中心に痘瘡大流行        | 京都から鎌倉にかけて小児が多く罹患 改元（宝徳から享徳へ）          |
|    | 一七〇八 | 宝永五  | 秋、麻疹流行                    | 九州から中国、近畿、東海地方へ拡大する                    |
|    | 一七〇九 | 宝永六  |                           |  |
|    | 一七一一 | 正徳一  | 春、重 江戸で痘瘡大流行              | 幕府が住民に薬品を配布する                          |
|    | 一七三六 | 享保二一 | 二月 江戸で痘瘡流行                |  |
|    | 一七六四 | 宝暦一四 | 江戸で痘瘡大流行                  |  |
|    | 一七七六 | 安永五  | 三月、秋 麻疹大流行                | 三十歳以下の成人麻疹で多数の死者が出る                    |
|    | 一八〇三 | 享和三  | 麻疹大流行                     |  |
|    | 一八四六 | 弘化三  | 愛媛で痘瘡流行                   |  |
|    | 一八六二 | 文久二  | 四月 麻疹史上最悪の大流行「文久麻疹」       | 幕府「疫毒豫防説」刊行 江戸での麻疹による死者は二四万人といわれている    |
|    | 一八六六 | 慶応二  |                           |  |
| 明治 | 一八七四 | 明治七  | 天然痘流行                     | 孝明天皇が天然痘で崩御する                          |
|    | 一八九〇 | 明治二三 | インフルエンザ流行（初めて「インフルエンザ」とし） | 死者三万二千人 政府「種痘規則」を改正、子どもへの二回接種を義務づける    |
|    | 一八九二 | 明治二五 | 三年間 天然痘大流行                | 「医制」が公布され、定期種痘を定めた「種痘規則」が布達される         |
|    | 一九〇八 | 明治四一 | 天然痘大流行                    | 孝明天皇が天然痘で崩御する                          |
|    | 一九一八 | 大正七  | インフルエンザ「スペインかぜ」大流行        | 死者一万八千人・死者五七〇人                         |
|    | 一九二九 | 昭和二  | インフルエンザ「スベインかぜ」大流行        | 死者一万六千人                                |
|    | 一九三〇 | 昭和三  | この年の天然痘患者を最後に国内患者はゼロに     | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九三二 | 昭和五  | インフルエンザ「香港かぜ」流行           | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九三三 | 昭和六  | インフルエンザ大流行                | 死者一万五千人（内ゼロ歳児が全体の二四%）                  |
|    | 一九三七 | 昭和十  | インフルエンザ大流行                | 全世界で約二千万人以上が死亡したとみられている                |
|    | 一九四〇 | 昭和十四 | インフルエンザ大流行                | 推定患者数千八百万人以上、死者二万三千人以上                 |
|    | 一九四二 | 昭和十六 | インフルエンザ大流行                | 推定患者数千八百万人以上、死者二万三千人以上                 |
|    | 一九四五 | 昭和十八 | この年の天然痘患者を最後に国内患者はゼロに     | 全世界で二百万人以上が死亡したとみられている                 |
|    | 一九四六 | 昭和二十 | 外国からの引揚者の影響で天然痘大流行        | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
| 昭和 | 一九三二 | 昭和六  | インフルエンザ「スベインかぜ」大流行        | 死者一万五千人（内ゼロ歳児が全体の二四%）                  |
|    | 一九三三 | 昭和七  | インフルエンザ大流行                | 全世界で約二千万人以上が死亡したとみられている                |
|    | 一九三七 | 昭和十  | インフルエンザ「香港かぜ」流行           | 推定患者数千八百万人以上、死者二万三千人以上                 |
|    | 一九四〇 | 昭和十三 | インフルエンザ大流行                | 推定患者数千八百万人以上、死者二万三千人以上                 |
|    | 一九四二 | 昭和十五 | インフルエンザ大流行                | 推定患者数千八百万人以上、死者二万三千人以上                 |
|    | 一九四五 | 昭和十八 | この年の天然痘患者を最後に国内患者はゼロに     | 全世界で二百万人以上が死亡したとみられている                 |
|    | 一九四六 | 昭和二十 | 外国からの引揚者の影響で天然痘大流行        | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九四七 | 昭和二十 | インフルエンザ「香港かぜ」流行           | 死者一万六千人                                |
|    | 一九四八 | 昭和二十 | インフルエンザ「スベインかぜ」大流行        | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九四九 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九五〇 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九五二 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九五三 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九五五 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九五七 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九五八 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九六〇 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九六二 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九六三 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九六四 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九六五 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九六六 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九六七 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九六八 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九六九 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九七〇 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九七二 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九七三 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九七四 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九七五 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九七六 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九七七 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九七八 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九七九 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九八〇 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九八二 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九八三 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九八四 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九八五 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九八六 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九八七 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九八八 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九八九 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九九〇 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九九二 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九九三 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九九四 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九九五 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九九六 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 一九九七 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 一九九八 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 一九九九 | 昭和二十 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 二〇〇〇 | 平成二  | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 二〇〇一 | 平成三  | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 二〇〇二 | 平成四  | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 二〇〇三 | 平成五  | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 二〇〇四 | 平成六  | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 二〇〇五 | 平成七  | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 二〇〇六 | 平成八  | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 二〇〇七 | 平成九  | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 二〇〇八 | 平成十  | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 二〇〇九 | 平成十一 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 二〇一〇 | 平成十二 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 二〇一一 | 平成十三 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 二〇一二 | 平成十四 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 二〇一三 | 平成十五 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 二〇一四 | 平成十六 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 二〇一五 | 平成十七 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 二〇一六 | 平成十八 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 二〇一七 | 平成十九 | 天然痘大流行                    | 発症者一万八千人、死者三千人                         |
|    | 二〇一八 | 平成二十 | 天然痘大流行                    | 死者一万六千人                                |
|    | 二〇一九 | 平成二十 | 天然痘大流行                    | 全世界で約二千五百万人死亡したとみられている                 |
|    | 二〇二〇 | 令和二  | 新型コロナウイルス大流行              | 政府が「新型コロナウイルス等対策特別措置法」を公布する            |
|    | 二〇二一 | 令和三  | 新型コロナウイルス大流行              | 政府が「新型コロナウイルス対策本部」を立ち上げる               |
|    | 二〇二二 | 令和四  | 新型コロナウイルス大流行              | WHOが「世界天然痘根絶」を宣言する                     |
|    | 二〇二三 | 令和五  | 新型コロナウイルス大流行              | 国内の患者数約十一万七千人、死者七百人以上                  |
|    | 二〇二四 | 令和六  | 新型コロナウイルス大流行              | 日本での天然痘の定期予防接種を停止する                    |
|    | 二〇二五 | 令和七  | 新型コロナウイルス大流行              | 政府がワクチンを緊急製造、予防接種を実施する 全世界で百万人以上死亡した   |

## 病除の習俗



### そみんふ 蘇民府

除災を願って神棚や仏壇に供えたり戸口に吊したり、小さいものは懐中に携えます。小正月（1月15日）に「蘇民将来子孫守」と記した木製の短い六角形の棒を疫病除けの御守として社寺から受ける風習があります。加須市の騎西城跡からは、この木製の護符が出土しています。「蘇民将来子孫之家」、「蘇民将来子孫之宿」、「蘇民将来之家門也」と書いた守札を門戸になどに張って疫病除けとしたり、正月の注連縄に「蘇民将来之子孫也」と書いた護符をつけて門口に飾ります。また清明判（魔よけの五芒星）や薬師如来を表す梵字などの文字を記した札もあります。蘇民将来につけられる清明判などからみて、この蘇民将来の護符の普及には修験者や陰陽師などの関与があったことが推測されます。



清明判（五芒星）部分拡大



## 張り子

張り子は、紙と糊を胡粉<sup>こふん</sup>で作るので軽量に仕上がります。この重量的な「軽さ」と病状の「軽さ」を結びつけ、疫病除けの呪具として用いられるようになりました。



こいくま

こいは、古くから立身出世の象徴とされています。急流を乗り越えることから、無事に病気が治ると信じられていました。くまは、体が大きく強いことから、こどもの成長に縁起が良く魔除けや災難除けの象徴とされています。



みみずく

みみずくは首が360度回るため、全方向を見張って病魔の侵入を防ぐことができるとされ、目が丸くて大きいことから、疱瘡による失明を退けるとも信じられていました。



いぬ

疱瘡神は犬（の鳴き声）が苦手とされていること、疱瘡が「去ぬ（いぬ）」との語呂合わせなどがあり、いぬは疱瘡を除けると信じられていました。



うさぎ

うさぎは、目の赤さから疱瘡により生じる赤の発疹や熱による失明を防ぐといわれています。うさぎの血肉、排泄物が疱瘡に効くとされ、糞を細かく粉末状にして番茶と合わせて水で溶き目の洗浄薬としたり、血を摂取して丸薬を作りこどもの年齢だけ服用したりしました。発疹のかゆみ対策としてウサギの手足で患部をなでるといふこともおこなわれました。



だるま

だるまは七転び八起きといわれ、いくら転がしてもすぐに起き上がることから「病床からの起き上がり」を意味しているともいわれます。疱瘡にかかった多くのこどもが失明したため、「目なしだるま」を用意してだるまに目を入れることで疱瘡除けにしました。

「疫病とくらし」展示の病除習俗のコーナーは、疱瘡神が好きな又は嫌いな色と言われている赤い色を多く用いて立体的な空間を作りました。



ひいらぎいわし

## 柁鯛

令和3年（江ヶ崎地区個人宅）

柁鯛とは、柁の枝に焼いた鯛の頭部を挿し、立春の節分に玄関に飾ります。目的は、鬼除け、魔除けです。焼き鯛の匂いで鬼を引きつけ（または追い払い）ます。柁は、その棘で鬼の目をつついて退治するためといわれています。



## 疱瘡神まつり（復元）



「疱瘡神祭る図」  
『疱瘡心得草』より



「赤い風車」

病床で、子供が風車を持っています。患者を孤独にしないように看病する人も赤い着物を着ます。

疱瘡にかかった患者の部屋は、こういう風になるとよいという古文書が残されています。部屋に注連縄を張り、赤い紙垂を下げたり、疱瘡棚を作ったりします。疱瘡神をまつることによって疱瘡神に喜んでもらって、病気が重症化しないで軽くなるようにという意味があります。

また、赤い物はお見舞い品として疱瘡の時に贈られました。

## 背守り



背守り部分拡大



上：セーマン（五芒星）

下：ドーマン（九字）

背守りとは、簡単に言えば子供の着物の背中に縫い付けた「魔除けの刺繍お守り」です。大人の着物には「背縫い」という「縫い目」ができ、この「目」が背後から迫り寄る魔から守ってくれると考えられていました。しかし幼児の着物は小さいためこの縫い目がありません。そのため子供の着物の背中に刺繍をお守りとして縫い付けたのです。この着物には、セーマン（五芒星）とドーマン（九字）を縫い付けました。



赤べこ

福島県会津地方の郷土玩具で、赤い首振り張子人形です。東北地方の方言で「べこ」とは牛のことで、子供の魔除けとして用いられてきました。身体の斑点は、痘を表しているといわれています。かつて天然痘が流行した際、子どもたちを守ったとの言い伝えがあり、地元では疫病を防ぐお守りとして大切にされてきました。このコロナ渦で売り切れ状態だそうです。



鯛車

鯛の両側に車輪が付いています。江戸時代から続いた「新潟住吉祭」では巨大な鯛を乗せた山車が曳かれました。これが鯛車の原型ですが、明治時代に入りこの祭りが禁止されます。やがて小型し子供が曳いて遊べる小さなものになりました。展示品は、鹿児島神宮の鯛車で、モデルは「海幸彦」の釣針を飲み込んだ鯛なのだそうです。

## つるし雛

桃の節供に飾られる雛飾りです。お内裏様、お雛様の並ぶ雛人形に対し、庶民的なイメージがありますが、つるされている飾りを見ると、雛人形ではあるものの目的が異なるようです。飾られる人形には縁起物が多く見られますが、「だるま」、「うさぎ」、「いぬ」、「ふくろう（みみずく）」などのちりめん細工は張り子をモデルにしています。これは、展示されている疱瘡絵とも通じるものです。つるし雛には疫病除けの願いが込められていると考えられます。



うさぎ



ふくろう（みみずく）



いぬ



さんかく

「さんかく」は、薬袋や香袋を表しています。病気をせずに健康でいられるようとの願いが込められています。



昭和40年代くらいまで、粉薬などはこのような形で包まれていました。



## 乳香



「乳香という薬を香を焚くようにすこしずつ燃やして、汚れや不潔なものを除き」と香坏牛山の『小児必要養育草』に書かれており、病室の空気を清浄にするために使われていたことがわかります。乳香は、インド、オマーン、アフリカ北部などの熱帯地域の常緑低木であるカンラン科ボスウェリア風のニューコウジュの樹脂です。香木として古くから儀式等に使われ、また漢方薬としても利用されてきました。展示では、乳香の精油を用意して香りも試していただきました。

## 赤い色について

縄文時代、チャートなどの赤い石ばかり集めていたことがわかっています。緑色の石はペンダントにすることが多く、赤い石はおそらく紐をハチマキのようにして額につけていたのだろうと考えられています。また、お墓は穴を掘って作りますが、ベンガラで底面を真っ赤にしています。(ベンガラは、鉄バクテリアが酸化して赤くなったもので塗料になる。) 古墳時代には、古墳内部の石室を赤くしたりしています。根源は、人間の血の色が赤だからといわれています。くわしくはわかりませんが、ずっと昔から日本人にとって赤い色は特別な色とされてきました。縁起が良い、魔力を持っているといわれています。



鯛



赤餅



赤飯 (あずきめし)



さるぼぼ



姫だるま



でんでん太鼓



だるま

# 箕加持



古文書から箕を使った呪を復元しました。

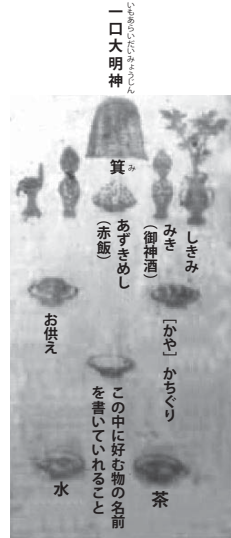


「越前国疱瘡孫嫡子箕加持略記」

江戸時代

(蓮田市下蓮田)

- おまもりのかけかたは、男は左の肩、女は右の肩にかけること。
- 一、瘡癩にかかった子供は、体に毒な物や悪いものもない物を好むので、その名前を赤紙に書いて皿の中へ入れてお供えすること。
- 一、鼻がつまづいてしまった時は、鼻がうづいてしまつた、また便秘になつた時は、便がうづいてしまつてお供えすること。
- 一、寝たり起きたりをする時は、箕を拭きおこすこと。
- 一、出入りを好む時は箕を出し入れすること。
- 一、かゆがる時は、箕をかきこすこと。
- にいいことを好むときは、箕のあしを洗つこと。
- 仏へ参詣好むときは、この箕を持っていくこと。
- 何事も、瘡癩のとく箕を取り扱ふはその□□□。
- 事非常に神妙である。
- つ、おまもりの、なし、みかん、ゆず、せなか。
- おまもりのものをいやるときは、えじゆを除けしきの葉を焼かす□□□。
- を好むのは□□□よ。



発熱してから十五日間のお記りのしかた

箕加持とは「箕」を使った呪です。「み」という音が同じことから、箕を患者の身(体)の代わりとするわけです。だから患者が痒がった時には、患者の身体を搔かずに箕を搔くのです。このような言葉の音から変換する事例としては犬があります。犬は「去ぬ(いぬ)」とし、病気が去ると考えました。張り子の犬は、病状が「軽く」済んで病魔が「去る」との意味が込められています。一休さんでおなじみの頓智ですね。



## おわりに

ご覧いただきありがとうございました。令和2年度季節展「疫病とくらし」、そしてこの「もうひとつの疫病とくらし」はいかがでしたでしょうか。疫病を扱った展示に向け動きだしたのは今から一年ほど前でした。当時は、この展示に関わるスタッフの誰もが、「展示が終わるころには新型コロナウイルス感染症の拡散は収束しているだろう」、と考えていましたが、展示準備をすすめていくうちに、果たしてこんなもので終わるのだろうか、歴史的経緯を知るたびに不安が増してきました。この一年間でさらに感染が拡大しました。日本で一日1万人以上の患者が出るなどと微塵も想像もしていませんでした。厚生労働省によると、すでに国内累計患者数は92万人を超えているそうです。

何度も発令される「緊急事態宣言」により私たちは日常の行動を制限され、自宅で過ごす時間が多くなりました。お正月休みもゴールデンウィークもお盆休みも、延期になったオリンピックが開催されても、私たちは自宅で過ごすことを余儀なくされました。サラリーマンには、リモートワークや時差通勤が推奨されています。大学生はオンライン授業が主になり、大学へ行く回数が激減しています。高校生以下の子どもたちは行事等の中止や延期が相次ぎ、勉強以外の貴重な学びの場を奪われてしまいました。新型コロナウイルスの上陸からたった二年半で、今まで当たり前だった日常が大きく様変わりしてしまいました。生活様式の急激な変化は人々をいろいろな意味で不安にさせます。

私たちの先祖も、疫病が流行するたびに変わったことでしょう。変化する生活に、戸惑いながらも対応してきたのだと思います。きっと今と同じはずです。地域で最初に出た患者の家を隔離施設とするなどは、現在の自宅療養・宿泊療養に相当します。現在ほど医療技術のなかった当時も、感染拡大防止のために現在と同じような対処をしていたのですね。

また、当時は衛生観念が低く、それも疫病の流行に拍車をかけたと考えられています。ヨーロッパから来た医師らに指南され、衛生に対する考え

方も少しずつ変わっていきました。現在、マスクをするのは基本であり、手洗いうがいも当たり前で、消毒をしないと不安になる…私たち自身の衛生観念も変わり、以前はわざわざ気をつけておこなっていたことが、今ではすっかり生活の中に溶け込んでいます。

今年に入ってから日本でもワクチンの接種が始まり、およそ40%弱の人がワクチン接種を完了しました。ワクチンについて様々な情報が飛びかっていますが、種痘の出始めも同じような状況だったようです。牛痘を使っていたことから、牛痘を接種すると顔が牛になるなどというデマが拡がり、なかなか接種が進まないため、種痘を奨励する広告が出されるほどでした。それまで祀っていた疱瘡神は実は悪いものだったと宣伝し、牛にまたがった子ども「牛痘児」が種痘に使う「ランセット」を構えて疱瘡神を追いかけしているという姿が描かれているものです。今もワクチン接種に対するデマが拡がっており、テレビで「ワクチンを接種しましょう」と呼びかけています。種痘の騒動が時代を超えて繰り返されていることを実感します。病気もワクチンも私たちの体にとっては異物です。感染することへの恐怖、ワクチン接種に対する不安は、いつの時代でも同じかもしれませんね。

溢れかえる情報の中、フィルターバブルに溺れることなく、正しい情報を選びとる力、自分で判断する力、これが疫病とくらすなかでますます重要性を増してくるのだと思います。

最後になりますが、新型コロナウイルスでお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りし、療養されている方々の早いご快復を願うとともに、最前線で闘っている医療従事者の方々に感謝申し上げます。

令和3年8月31日 展示館スタッフ